

最優秀賞

僕と乳房

兵庫・神戸大学附属中等教育学校 四年

吉田 眞子

僕の高校ん時のあだ名は  
ちちふさ

漢字にすると乳房

そう これはちちふさ

僕には無いけど やかましいわ

ある日の五限 現文

みんなで行かず読むの あるでしょ

僕が読む行に あったんです

乳房(ちちふさ)が

僕ホラ思春期だったんで なんか

さらりと読むのも恥ずかしい気が…

しない? 僕はしたんです

だからワザと間違えて読んだら

僕は乳房に興味が無い とみんな思う

そう考えて読みましたよ

「輪郭のぼやけた遠山は

まるで流れる乳房(ちちふさ)のようだ」

って それからです

何だったんでしようね あの文

誰かあれ乳房(にゆうぼう)って

読まなかったのかな

〔優秀賞〕

タイムリミット

北海道・立命館慶祥高等学校 二年

村上 陽香

焦らないと息ができないんです

当たり前っていうものをつくると

それを失うのが怖くて

大丈夫、

当たり前が消えなくてこそ世の常です

でも先生、

万物はすべからく流転します

地球ごと反転した明日

この世から電池が一本もなくなっていたら？

それはまるで常夏のビーチ

さんちやく袋におかねは入っていますか

いいえ

焦りたいのでいれていない

くびからさげたそれは？

お守りです

占い師に言われたもので

わたしは神の子なんです

二股に分かれた生命線が証拠

朝日が昇り

カーテンが開かれる

そこにいるのは隣のおじさん

マグカップにそそぐトマトジュースや

一日で半キロも違う体重計

指先が磁石なぬいぐるみと

二秒で書ける生年月日

死に顔なんて思い浮かばない友人に

明日手紙を書こう

お元気ですか、

わたしは元気です。

優秀賞

立ち止まって、一步

埼玉・淑徳与野高等学校 二年

内藤 結月

おわり。

すいかを食べて、残った皮は白い。

だから、おわり。

息を吐け。生きてるしるしに。

まあ、誰も見てないけど。

暑さは、気づいたらいなくなって、

隠れ家も消えてしまった。

おわり。夏の終わり。

ふわふわした存在に、ぶよぶよした時間。

蝉は、やっと姿を見せたと思ったら、もう鳴かない。

ぐにやりと歪んだ体は、いつの間にか羽だけだった。

蟻が、食べちゃったのかな。

「ねえ？」

誰もいないね。

息を吸う。それでいい。

もうおわり、じゃ、ないだろう。

この夏はもう、逝っちゃったのに

「今日」はまだ、離れてくれない。

息を吐く。そうしよう。

いつか、分かるだろうから。

いつてきます。声を上げて。

いつてきます。足を出して。

いつてきます。目を開いて。

太陽が白い歯を見せてにやり、笑った。

佳作

もの思い

群馬・高崎商科大学附属高等学校 一年

小板橋 彩花

時々わたしは思うの  
ものが喋ればいいのになんて

シヨッピングモールに行った時  
ひらひらワンピースが  
わたくしあなたに似合うのではなくって？  
って

学校から帰る時  
電車のピポリン定期券が  
もうホームに行ったほうがいいんじゃない？  
って

旅行の時  
パラパラ旅行誌が  
ココがオススメって書いてあるけど  
自分的にはこっちなんだよねー

ひとりぼっちの時  
カチコチ時計が  
いつも壁に掛っててつまんねーんだけど。  
外につれてけ  
って

そうしたら  
キレイよね？  
ワクワクよね？  
寂しくないよね？  
ひとりぼっちが  
みんなになって  
たのしい一日に  
なるよね？  
って  
わたしは思うの

佳作

感情の詰まったペットボトル

神奈川県立麻生高等学校 二年

安田 武流

会社と家を往復する生活

そりゃロボットみたいにもなりますって

そんな中でここを見つけたんですよ

感情を売っているとはこりゃすごい

店主や店主、ケケケと笑うのはいいが

喜び一つ売ってはくださらねえか

ケケケ ケケケその棚

お代は結構、まずはお試しあれ

ぐびりと一口

黄色いリングが喉を下る

すっちゃらら ペっちゃらら どごどごどん

こりゃすごい、思わず小躍りどごどごどん

だが店主、これじゃ仕事になりゃしない

ケケケ ケケケ次はほれ、その棚

次は安心、安心さね

がぶりと一口

トマトジュースは心に届く

けらけら ころん すやすやすや

ああ店主、こんな気分は久々だ

このボトル売っておくれ 売っておくれ

ケケケ ケケケ

そんならあなたの感情売っておくれ

そしたら売るさ、このボトル

あなたの疲労、感動、後悔

売っておくれ 売っておくれ

いや店主、金で買わせとくれ

ケケケ ケケケ

勘違いしとりやせんか

感情は金じゃ買えやせんよ

ケケケ ケケケ

佳  
作

金曜日

東京都立日比谷高等学校 一年

浜口 すす

ひとみの鮮やかな彫刻を見るような眼で  
すすめを見つめないで

すすめは期待には応えられません

あの空高く浮かぶひこうきが

この空の端から端まで行かないうちは

すすめ ここから動きません

すすめ すずめ あのまっすぐな国道

買ったばかりのヨーグルト

汗だくで起きる真夏の朝のかすかな緊張

ノイズの消えない古いラジオ

腰をかがめて顔を洗うひと

「すすめはあの角を右にまがってどこへ行くの」

たずねる子どもの ほっぺの赤み

佳  
作

幽  
霊

東京・田園調布雙葉高等学校 二年

本領 里緒

幽霊になったらば

川で水浴びでもしてやろう

水が冷たくたって、汚くたって、かまうものか

思い切り頭から川につっこんで、カラカラ笑ってやろう

幽霊になったらば

人の顔でも見てやろう

死んだ自分よりもっと死んでいるような

濁った目を、じっと覗いてやる

見えるか見えないか知らないが

そんなつまらない目も、少しは楽しくなるだろう

幽霊になったらば

朝から寿司屋にでも行ってやろう

うんと美味しい寿司でも食って

こりゃあ死ぬほど美味しいなんて、カラカラ笑ってやろう

幽霊になったらば

知り合いの阿呆の背中でも蹴ってやろう

馬鹿は愚鈍で、阿呆は愚直

その辺が分かっているの、少しやさしく

力一杯蹴ってやる

肩身狭そうに丸まった背中も、すこしは真つすぐなるだろう

幽霊になったらば

育った町へ出かけてやろう

古い悪友どもに顔でも見せて

おめえら何も変わらねえなんて、カラカラ笑ってやろう

幽霊になったらば

育った家へ訪ねてやろう

もう人の住まなくなつたおんぼろ屋敷の

埃をかぶつた縁側に寝転んで

日向ぼこでもしてやろう

そして

ああ、生きてら

そう、カラカラ笑ってやろう

佳作

かわいい

岡山・岡山学芸館高等学校 二年

川上 紗和

肯定するということは

さながら蜘蛛の糸のようなのです

言葉が坩堝となり層となり重なった嫌悪が

ジャンキーなハンバーガーのように

体を蝕んでゆき

そこからとび出た

ピクルスやケチャップが

周りに飛び散り周りを汚す

あたしが求めているのは

本物の白鳥でもヘプバーンでもないの

普遍的な愛であったり

自分が完成することだったり

そんなこと

否定するということは

ある意味真つ当にポップなこと

捉えられることがおおく

それは自分自身で

行われることが多いのです

そこに粒子的な幸福を見出して

擬似的な自己の確立をする様子は

さながら

朝に焼きすぎちゃった焦げパンだ。

ねえ、

みんな「かわいい」から

不感症になっちゃえよ

なんかかわいいもん

## 入 選

### 夜明け

福岡県立明善高等学校 二年

川口 るみ

確かな重みを伴って本棚の上のほうに眠る純文学  
キャンデーを集めて並べて綴じてきたような詩集  
棚のてっぺんから郵便受けから顔を出す冒険小説  
黒々とした頁がちよっぴり開いているミステリー  
背伸びしたって届かない位置にあった仕掛け絵本  
ぴっぴかぴかのオレンジ色で時計仕掛けの翻訳小説  
吹き出しから抜き取った言葉の遊び場はエッセイ  
つやつやした手触りのこいぬ座まばたく天体図鑑  
積み重なり上に檸檬まで置かれた画集の群れ群れ  
鼻を近づけたら金木犀がひっそり匂った恋愛小説  
暗がりではうつつと青いサイエンス・フィクション  
事実（と写真と文字と知識）を愛している大辞典  
読まれるまで大人しくいようと決めたホラー小説  
花屋の店先と似た色合いのライトノベルの背表紙  
逆回りには進めない、謎が大きく渦巻く大河小説  
この景色を見ることになる予感がする旅の写真集  
下手に触れると凍ってしまいそうなお真つ白い新書  
獣の唸り、魔法の息吹を閉じ込めたファンタジー  
ヨンデヨンデヨンデと囁くみっちり詰まった文庫  
紙魚でゆっくりと読めなくなっていく遠くの古典  
だから午前5時の市立図書館はこんなにも忙しい

## 入 選

### 足踏みオルガン

東京・女子学院高等学校 二年

菊地 愛佳

目覚め！

廃校の教室の隅にひっそりと生きてきた

大正十二年製の君よ

えび茶袴の女教師はストップを引いたか

子らは「荒城の月」を歌ったか

戦火をくぐりぬけ  
ピアノの陰になり

時代を駆け抜けたオルガンよ

今日 生命をふきかえした

村の会堂のまんなかに

私はペダルを踏み込む

春の息吹を存分に吸い込んで

人々も歌い出す

まるでペダルの上下が見えるかのように

天使の高らかな歌声が

一人一人の心と結ばれて

空へ空へと昇ってゆく

坂を上る人のごとく

足を踏み続けていれば

岩にしがみつく人のごとく

鍵盤を押し続けていれば

音は途切れない という足踏みオルガンよ

歌が止む

手を離す

その後広がる残響よ

このふいごの中には

きつと

かみさまが住んでいるのだろう

## 入選

### 溺れる季節

沖縄・N高等学校 沖縄伊計本校 三年

島川 亜弓

アルバムからはみ出して、校門を出た

アイロンをかけて、白い春

部屋の隅で眠り

ちぎれた夕焼けを踏むこともなく

あの時、病院が間に合っていたら、

今、とか

電車はまだ嫌いです

哀しみを揺らして、わたしはわたしを許せない

猫の鳴く声があふつうであったなら、

ら、

きつと、きちんと、乗り換えができたのに

最後に一ど、ちゃんとできた一に

ち、もう一ぺん、

紙に収まらなくてもいい

「今はもう、ダムを見に行くこと

もなく

たまにおかしくなったりしていま

一枚にわたしは、収まってしまっ

けど、元気で

何度も、

終わらなかつた宿題や、車から降

りられなかつた朝などで、

ふつうを数えても

殺しきれない季節を、愛してしま

います

やつぱり、一枚には収まらず

判子を押した指先で

人生を削っては、文字にしていま

す

(すみません、ただ、でも、わたしはわたし)

なつかしさをひとさじ

珈琲に溶かしては夜を越す

また、夜が来るだけを待ち

## 入選

### 家族

埼玉県立春日部東高等学校 二年

関口 凌真

いつの日か 娘は言った

どうしてお母さんは泣かないの

と

わたしは

お母さんは強いからよ と答えた

娘は不思議そうな顔をしていた

ある夜 娘は何も言わなかつた

何も言わず 私に寄り添ってくれ

た

わたしも

娘に何も 言わなかつた

娘は一人で泣いていた

少しして 娘は笑った

娘の手には 大切な人の手が握ら

れていた

わたしも

何も言わずに 笑った

娘は愛を知った

また少したって 娘は笑った

この世で最も美しいだろう 神秘

的な笑み

わたしは

何も言わずに 涙を流した

娘の腕には小さな命が抱かれてい

た

しばらくたって 娘は年を取った

少し白髪も 混じってきたよう

だった

わたしは

そつと娘の 頭を撫でた

娘は今日も笑顔で大切な人たちを

送り出していた

ある朝、娘は倒れた

糸の切れた 操り人形みたいに

わたしは

声にならない 悲鳴を上げた

娘は苦しそうな顔をしていた

木漏れ日の差し込む昼 娘は眠っ

た

深い深い 眠りについた

わたしは

お疲れ様 と言った

娘は泣きながら笑っていた

私と娘は 二人一緒に

娘の娘を 見守っている

## 入選

### 銀

東京・桐朋高等学校 一年

小俣 卓紀

「公園のブランコ一人こぎ出してそこにびゅるりと木枯らしが吹く」

誰もいない公園のブランコが揺れた

まるで、見えない誰かが、乗っているように

木枯らしがびゅるりと吹く

木枯らしが先だったのか、ブランコの揺れるのが先だったのか

誰も知らない

「早朝の通学路には向かい風抵抗をやめ流されてみる」

いつもより一本電車を早くした

たったそれだけで、景色が違う

向かい風に逆らうのを止めてみよう

流されるまま進んでみよう  
昨日とは違う一日になるかもしれない  
「制服にマフラーはおって歩いて

も木枯らし強し負けそうになる」  
冬でも学生服のまま通学している

なんとなく、学生服のままが好き

だ  
風が強い朝

マフラーひとつくらい羽織っても

負けそうなほどの木枯し

それでもきつと、明日も学生服で

通学すると決めている

「まちまちの願いを載せて絵馬が

飛ぶ湯島天神に人の影なく」

それぞれの願い、それぞれの想い

神に託した絵馬が

これでもかというほどに連なっている

誰もいない境内

物音ひとつしない夕方

絵馬が飛ぶ音が聞こえたのは、やはり気のせいか

「カーテンを閉めた瞬間銀の箱僕

だけがいて何故か落ち着く」

カーテンを閉めたその瞬間から部屋は銀の箱に変わった

僕しかない空間、遮断された世界  
そこにはまだ怖さはなく、安堵する僕がいる  
何故なら、いつでもこの箱から抜け出せることを知っているから

## 入選

### みじん切り

福岡県立明善高等学校 二年

牛島 伸陽

うんそうだ

みじん切りにしよう

なにもこのくらいにさ

だつて おもい なんて

微塵ものこっちゃいないでしょ

Refrigerator前

仏頂ツラして仁王立ち

小指の爪の先程度の

罪悪感と切り刻む作業

常套句なんて 聞き飽きた

あんなに ながい 時間を

積み上げた モノ に

未練は ないのか？

答え 一切 明快

今日も夜明けのKitchenに

立って 探し 待って居る

白んでゆく空に

諳んじることほもう無い

すべて、すべて忘れて

何食わぬ顔で笑つていよう

無邪気なあの子に、

あの子の笑顔に

入選

SET sail

鹿児島・ラ・サール高等学校 三年

梶 伸太郎

桃の果汁  
が広がる  
ようにその  
海にも  
朝がきた  
ちいさな  
波がストローから  
こぼれる  
その部屋の  
朝にも  
海がきた  
鴉が生まれ  
鴉が  
眼下一面  
のガレキ  
に心と  
翼を  
ゆらしながら  
ゆつくり飛んでいく  
ひとりでに浮かんでいる  
太陽を食べようとしているらしいその  
濡れたクチバシ

入選

太陽の裏

東京・国際基督教大学高等学校 二年

牧野 かれん

雲から生まれたビー玉は  
太陽の裏が見たいという  
生憎羽は見当たらないが  
空を跳ねて会いに行く  
ピョンピョンと  
ピュアな心で隠秘した  
突飛な空はピンク色  
呼ぶ笛に答えはない  
笛の声は美しい  
光を眩しく反射して  
光の中を透過して  
光の先に見えたのは  
ただの太陽の裏だった

入選

花火

千葉・渋谷教育学園幕張高等学校 二年

伊藤 寛子

突然打ち上げられた花火は  
暗闇に一瞬で燈を与えた  
街は急に眩しくなった  
私は下を向いた

そこにいたのは  
下ろしたての浴衣で躍る少女  
夜空に想いを重ね合わせる少女  
——ああ、なんて素敵な世界だ

ふと手元を見ると  
プリーツの取れかかったスカートをはいた私  
よれたリュックに重たい荷物を抱えた私  
——希望はどこに消えたのだろう

闇の中の明るさを背に  
私は再び歩み始めた

その背中には打ち上げ花火が  
リフレクトしていた

入選

息を吸う

埼玉県立浦和第一女子高等学校 三年

梶原 翠

パステルカラーの箱の中  
わたしたちは笑ってる

カレーが好きなのも  
塾の課題をさぼった人も  
スマホのケースを買い換えた人も

わたしは  
先月お気に入りの小説をみつけたし  
先週愛猫を亡くしたし  
今日は駅で麦茶を買ったし  
今は少し頭がいたい

真っ白な空気を 飲み込んで  
わたしは わたしたちに

ベビーピンクのハートを添えて  
表面をモルタルで覆うみたいに  
無機質で華やかでひどく平和な  
パステルカラーの箱の中  
わたしたちは笑ってる

## 現代詩の部選評

詩人

### 水無田気流

今回、本コンテストは4回目の選考を務めさせていただきました。今年の現代詩部門への応募作品数は852篇と、前回の1265篇に比べて数こそは減少しましたが、「学校の課題で」「文芸部の顧問の先生に勧められて」といった事由での投稿は前回より激減し、「学校の掲示板を見て応募」や「高校生のときにしか出来ないことをしたいと思ったので」等、独立独歩型で熱のこもった応募が増え、上位層の水準はむしろ上昇した印象を受けました。

昨年は「言葉の表層と内実のずれ」を愉しむような技巧を駆使した作品が目立ちましたが、今回はその「内実」を形作る微少な差異を丁寧に掲げた作品が数多く見られ、嬉しい悲鳴を上げながらの選考となりました。

ただ最優秀賞を受賞された吉田眞子さん「僕と乳房」は、これら他の入選作と全く異なるアプローチの作品でした。通常、このような設定のある作品は散文詩にも類し現代詩では難しいのですが、この作品は一見日常的でありながら、言語化が厄介な感情を切り取り、その切断面を拡大するかのようです。

テーマとなった「あだ名」は、たった一瞬の

「僕」の「(意図的な)誤読」から生まれたものですが、それは他者からの強引な名指しであり、クラスメートが共有した思春期特有の感情の「象徴」でもあります。これに対し、本名は「記号」です。記号は本人と等価に交換され得ますが、象徴は当人の一部をある種デフォルメしたもので、「自分と等価ではない」時に不本意」ですね。

本作は、極めて適正な分量で書かれている点も、高評価となりました。おそらくこれ以上足しても、引いても、本作品は成立しなかったでしょう。定型詩と異なり、現代詩に音数の規則はありませんが、私見では、作品の分量には必然性があります。その意味で、優秀作と佳作の間に主題や言葉遣いなどの力量に差はないのですが、あえて言えば佳作になった作品は、若干終連を中心に冗長な点が気になるものが目立ちました。

優秀賞となった村上陽香さん「タイムリミット」は、条件・否定・条件・否定・肯定・否定・仮定……と展開する中で、条件の否定と肯定の振り幅を激しく上下させる構成になっています。昨年も優秀賞を受賞されましたが、前作は驚くほど明るく、それゆえに一瞬の儂さを集中的に描いたような作品だったのに比べ、今作はより言葉の選び方、組み合わせ、韻律のパラメータが繊細に絡み合い、練度を増した印象です。終連を読むと、この一般的な言葉に連なる余剰の多さを思い、終連から逆算で創作したようにも思えました。

同じく優秀賞となった内藤結月さん「立ち止まって、一步」もまた、「終了」を潔く初連冒頭に持って来て、肯定・否定・肯定……の組み合わせを印象的に使った作品です。高校生新聞という媒体の特性からか、今この時期しか書けない「何か」を書こうとする作品は多いのですが、本作はその潔さで一頭地を抜いていました。一見素朴な「終了へのささやかな抵抗」は、初連の鋭利で畳みかけるような基調との対比がなければ、活きなかったでしょう。

前回同様、全般的に初連ないしは終連が冗長な点で、それが大変に惜しい作品が目立ちました。現代詩は、一見音数が決まった定型詩よりも自由ですが、それゆえに「捨てる勇氣」が試される表現分野だと、今回も再認しました。

#### ● 水無田気流(みなした・きりつ)

昭和四十五年神奈川県生まれ。早稲田大学大学院社会学研究科博士後期課程単位取得満期退学。平成十四年から、水無田気流の筆名で思潮社の『現代詩手帖』に詩作品の投稿をはじめ、平成十五年に第41回現代詩手帖賞を受賞。平成十七年に『音速平和sonic peace』(思潮社)を出版、翌年に同作で第11回中原中也賞受賞。平成二十年、『Z境』で第49回晩翠賞受賞。また社会学者としても活動し、学術論文の執筆などを行うほか、評論に『シングルマザーの貧困』(光文社新書、平成26年)、『居場所のない男、「時間」がない女』(日本経済新聞出版社、平成27年)等多数。平成二十五年朝日新聞書評委員に就任。平成二十八年四月より國學院大學経済学部教授。